

# 教職課程の総括的学び

## －青少年の性行動変化に伴う子ども理解を通して－

牧野 紀子

### 1. はじめに

性をめぐる状況は、パソコン・携帯電話・スマートフォン・インターネットやSNS等の普及に伴う、性情報の氾濫、少子高齢化を危惧しての婚活・妊活問題、人権問題として注目されるLGBT・セクシャルハラスメントそしていわゆる「草食系男子」出現など、社会全体を通して様々な局面で変化し、多様化している。

しかし、学生たちは性に関して大学で特に専門的教育を受けることなく、高校までに受けた性教育の知識とその後三年間の経験をもって教育実習へと臨む。保健体育の免許を取得する学生は保健の授業の中で性に関わる単元を受け持つことが多いが、これもほぼ同様な状況で実習をこなす。しかもその「タブーとしての性」の認識は何十年もほぼ変わらず存在している。

2017年の「青少年性行動全国調査」では、対象となる中学生では4割近く・高校生の6割の生徒が「性」に対して関心を持ち、中学生の女子は八割が月経を経験し、高校生ではおおかたの男女が射精・月経を経験している。

今日では中学生の58.1%高校生の95.5%がスマートフォンを利用しており、パソコンやゲーム機などを含めインターネットが利用できる環境に90%以上の児童・生徒が置かれ、いつでも「性」を含む様々な情報を入手することが可能になっている。思春期を迎える生徒にとって「性」の問題は気になりながらも、対応に苦慮する問題である。

教育実習生は実習中、教師としての役割を担うが学生である。生徒から見れば自分達より大人ではあるが、年齢的には最も近い存在である。しかも多くの学生が母校に出向くので、あこがれの先輩でもある。彼らは、時には性の悩みを打ち明けられたり、相談されたり、性的関心の対象となったりもする。

このような中で、これから教育現場に出ていく学生にとって性、あるいは性教育はできれば避けてとおりたい課題である。しかし、これから生きる子供たちと教師にとって「性」すなわち「セクシャリティ」－「性と生の在り方」を問い、考えていくことは重要な課題である。教職課程においてセクシャリティ「性と生のあり方」を思考することは生きることそのものを考えることであり、その中には教科指導や生徒指導をも含む総括的学びがある。思春期の中学生や高校生を考えると「性」の問題は避けては通れない学びである。

### 2. 現在の性教育の現状

2016年に関東圏で4000名の高校生を対象に行われた性知識の調査を見ると、排卵や射精といった基本的知識を問う質問に対しての回答の正解率は二割前後、避妊やピルについての質問の対しても正解は三割以下、七割以上の生徒がわからないと回答している。

「教育実習演習」(性教育)の中でも受講生に高校の教科書レベルの性に関する基本的質問を

行うと同様に正答率が低く、間違えるというより、わからないとする回答が多い。私が教員を始めた40年ほど前から、詳しく性の情報を伝えることは「寝た子を起こすことになる。」といわれてきた。しかし、ほとんどの生徒が第二次性徴を経験し、性的関心を持ち始め、多くの性情報にさらされる中で「性」について語らずに過ごせる状況ではない。

「教育実習演習」の授業で、受講生に『生徒から「先生セックスしたことある」と聞かれたら自分の立場でどのように答えるか』という課題を出しておいた。そのタイミングで先輩教員3名を招いてのパネルディスカッションがあり、その場で、一人の学生がこの質問を先輩教員にぶつけた。三人は三様に「わからない,」「困ったなー」と明確に答えられない中「そんなのは先生をからかっての、興味本位の質問だから打ちちゃっておけばよい。」という答えもあった。

これが今の教育現場の実情であろう。この場面は、生徒による教員へのセクシャルハラスメントという側面もあるので十分に気を付けて対応しなければいけないが、「セックスを含む性」の問題を「興味本位のからかい」としてとらえるのではなく、「性」に対しても、教員対しても関心を持った生徒の発言として、真摯に受け止めきちんと答えていく必要がある。そのためには教員自身は自分の問題としてセクシャリティをとらえ、そして科学的知識をもって、生徒の「性」について学ぶ権利を保障しなければならない。

### 3. 包括的性教育

今日わが国では性に対する考え方が根底から覆されるような新しい動きが始まっている。それは人権と性についての世界的認識の変化であり、その背景にあるのは、性別二分論と異性愛絶対主義という柱の揺らぎである。「性」すなわちセクシャリティを「生涯を通じて人間であ

ることの中心的側面ををなし、生物学的性、性自認、性的役割、性的指向、エロティシズム、喜び、親密さ、生殖が含まれる」ものとしてとらえ、人間の生理学的側面だけでなく人間の心理的、社会的、文化的な面も含め広範なものとして考える。リプロダクティブヘルス・ライツとともに「性」を権利として位置づけている。包括的性教育はこのセクシャリティの概念に基づいて行われる教育であり、1999年に出された「性の権利宣言」(2014改定)には「すべての人が包括的性教育を受ける権利がある」ことが述べられている。

### 4. 「青少年性行動調査」

日本性教育協会は1974年から7回にわたって「青少年性行動調査」を行ってきた。調査の内容や方法がその回ごとに変わっていたりと同じ調査が繰り返されてきたわけではないが、40年にわたり全国で調査されてきた意義は大きい。継続的に続けられてきた項目もあり今回、7回の調査に含まれる、異なる世代の性行動や性意識の特徴が総合的・総括的に分析され、出版された。このデータを基に子ども達の性行動の変化を考察していく。

#### 4. 1 性の情報源

「青少年の性行動全国調査」のデータによると全期間通して、性の情報源として最も多く上げられたのは「友人・先輩」であった。次に比率の高いのは男子では「ポルノ雑誌・AV」「学校」「インターネット」「マンガ・一般雑誌」と続き、女子では「マンガ・一般雑誌」「学校」「付き合っている人」と続く。特に2011年の調査で2003年までの調査と大きく変化したものは「インターネット」の比率で男子では20ポイント女子で15ポイント上昇している。

「学校」での性教育については高校生の七割から九割の生徒が教わったと認識している。また1999年から2011年までの調査で性教育が役

にたつたと回答したものが増加の傾向を示し、男子で45.0%女子で53.3%が役に立ったと回答している。しかも学校での性教育が役に立ったと回答している方が性的イメージが肯定的であり、性交経験者では避妊の実行率が高った。2011年の調査では「HIV・エイズ」「妊娠のしくみ」「避妊の方法」「性感染症」など中学校や高校の指導要領の保健体育に示されている内容については教えられていると記憶している。「男女の心の違い」や「男女平等」「セクハラ・性暴力」といった項目の既習率も2005年から2011年にかけて半数の高校生が学んだと回答している。

#### 4. 2 性について何を知りたいか

この調査は何を学んだかとは別に「性について何を知りたいか」についても聞いている。ここ二十数年の調査を見ると「交際の仕方」「恋愛」「男女の心理や行動の違い」などが一貫してあげられる。また「性感染症」や「エイズ」といった危機意識も高いことがうかがえる。他の調査でも「自分と相手を大切にするとデートの方法」など具体的な事項が挙げられている。子ども達は保健体育の教科書にかかれていること以上により日常的に自分や周囲に発生しそうな男女の関係・行動に関連することに関心があるといえる。またもう一つ注目されることは「特に知りたいことはない」という回答が増えていることである。

#### 4. 3 性行動の変化

「青少年の性行動全国調査」の行われた初期の頃は「性の低年齢化」や「性の乱脈化」の進行が予想された。しかし調査を重ねる中で、そう単純に変化するわけではないことがわかってきた。全体としては青少年の性の「日常化」「早期化」「男女差の消滅」といった現象が起こったといわれる。性行動というと、一般的には性交をイメージして日常化、早期化はとんでもないと考える向きもあるが、この調査での性行動

の具体的内容は「デート」「キス」「性交」の三つの内容である。「デート」に関しては1974年から2005年までわずかずつ増加していて中学生が25%、高校生が61%、大学生が81%が経験している。2011年からは若干の減少がみられる。「キス」と「性交」に関しては1974年から2005年にかけて上昇傾向にあり中学生で18%、高校生で52%、大学生で73%が経験し、「性交」に関しては中学生で4%、高校生で29%、大学生で62%が経験している。この「キス」も「性交」も2011年からは低下傾向にある。

「性行動」のうち最も経験率が高い「デート」を考えると、青年後期の大半の人が経験し、今や小学生が「デート」するといっても誰も驚かない日常的行動となっている。

#### 4. 4 性行動としての「デート」

「デート」は社会学的観点から5つの機能があるといわれている。一つ目は異性との交際の「楽しみ」、二つ目は仲間から一人前認められる「地位の獲得」三つめは異性とのコミュニケーションによる役割期待の認知などの「性別役割学習」四つ目は社会における「社交の学習」五つ目は「配偶者選択」の機能である。これは子供たちが自分以外の他者を好ましく認識し、対人関係やパートナーシップについて学習しながら社会化していく重要なプロセスである。この中で他者の存在を意識し、異性の認識、尊重が図られる。また「デート」経験者の方が「性」に対して肯定的イメージを持つことも報告されている。性行動は突然「キス」や「性交」からはじまるわけではない。日常の会話や「デート」から段階を踏みながら進んでいく。

高校生たちが「性について知りたいこと」に挙げている「交際の仕方」「恋愛」「男女の心理や行動の違い」などはこのプロセスをどのように進めていくかということを模索しているあらわれである。「性」を種族保存や性交などのイメージでハードルを上げているのは大人たちの感覚であり、子供たちはもっと素直に自分達の

中に起きるときめきを大切にしているのかもしれない。

#### 4. 5 「草食化」する若者たち

草食系男子という言葉がマスコミに流れるようになった。2009年には流行語大賞トップテンにもえらばれた。使われ方によって意味内容にずれがあるが、「性や恋愛にがつがつしない若者」だという。「青少年性行動全国調査」でも2011年の調査からそれまでとは違った傾向が読み取れるようになってきた。1990年代から上昇していた中学生の「デート」「キス」高校生の「デート」「キス」「性交」の経験率が2005年を境に低下し、大学生も女子は16.6ポイント男子でも10ポイントと大きく低下した。「草食系男子」と男子に特定されているが、女子も同様の傾向を示している。それは性行動だけでなく「性に関心があるか」という質問に対しても1999年をピークに2005年2011年と中学生、高校生と大学生女子は大きく低下している。恋人の保有率も2011年には大学生で大きく低下し、恋人がいる人でさえ、「キス」や「性交」の経験率が低下している。

性行動の不活発化について整理してみると、1999年の調査で性に対する否定的なイメージを持つ人が増え、2003年から性に対する関心の低下がみられる。2011年から性交経験率が下がってくる。

このような変化がそもそもなぜ生じたかについては、これからの検討にゆだねられる。

この調査の「性」について「特に知りたいことはない」という回答が増えたことを重ね合わせると、「性の日常化」の帰結として、性が特別なものでなくなったため。また、「生活構造の多チャンネル化」による楽しいことの選択の増加。男女関係の平等化によって恋愛や結婚と結びつかない異性関係の増加などが指摘されている。学校の性教育が性の肯定的イメージや性に対する関心、避妊実行などを含めた性交に対

する肯定感に有効に働いているという調査結果から考えると2000年前後に起こった性教育パッシングによる性教育の後退現象の影響も考えられる。

#### 5. 性のありかたの多様性

2015年文部科学省から「性同一障害にかかわる児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」という通知が出され、性的マイノリティーの子供たちに対しての支援や教職員の理解向上に努める必要性を示した。しかし実態は学校全体に周知徹底されておらず、トイレや更衣室といった施設設備から名簿や制服などのシステムの在り方まで、きめ細か配慮がなされていないのが実情である。

「性同一障害」や「LGBT」という言葉はかなり浸透してきた。電通ダイバーシティ・ラボの調査によれば、性的マイノリティは全体の7, 6% 13人に一人という数字を示している。学校の45人学級には3人程度の割合でいることになる。長らく男女の二分法で思考してきた学校や教師は、対応に苦慮し、当事者は無理解と差別にさらされている。しかし、性別二分論と異性愛絶対論の中で苦しんでいるのは性的マイノリティーの子供たちだけでない。男らしさや女らしさを押し付けられた個々の子供たちも生きにくさを感じている。性は女性性と男性性との連続性の中のどこかに位置づいて存在する。一人ひとりの子供の個性を尊重し、認める中で、マイノリティーと言われている子ども達の存在する場所が確保できるのだろう。子ども達の感性は柔軟である。多様な性を知り、多様な性の人達と、共に存在することによって自分の世界を広げていく。

#### 6. 終わりに

2000年あたりから性の状況が大きく変化してきた。性を一人一人の権利として認めること。

その多様性を尊重すること。そして性や恋愛に消極的若者達の出現である。これは「草食系男子」の名づけ親の深沢真紀氏が「女性に無縁で無気力な若者」をさしているのではなく、「女子というものが恋愛やセックスの対象だけではないことを知っている」人をさし「よりよく」生きるより「ほどよく」生きようとする若者をさす。と言っている。草食系と呼ばれる若者達は性に対して一律のステレオタイプの対応ではない、多様な行動パターンを持ちはじめたのかもしれない。作家の想像力は時として科学を越える。「世界から家族、セックス、結婚が消える」というセンセーショナルなフレーズで未来を描く、村田紗耶香の世界もこの若者変化に続く世界かもしれない。

Japanese.pdf

「リプロダクティブ・ヘルス・ライツ」

<https://www.weblio.jp/content/%E3%83%AA%E3%83%97%E3%83%AD%E3%83%80%E3%82%AF%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%96%E3%83%BB%E3%83%98%E3%83%AB%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%84>

「高校生の性知識・性意識性の悩みに関する調査」NPO法人ピルコン [http://pilcon.org/about\\_us/greetings](http://pilcon.org/about_us/greetings)

---

## [参考文献]

- 林 雄亮編著 (2018)「青少年の性行動はどう変わってきたか」ー全国調査にみる40年ー ミネルバ書房
- 粕 潤一 佐藤明子 水野哲夫 村瀬幸浩 (2016)「ヒューマン・セクソロジー」 生き ていること 生きていくこと もっと深く考 えたい 子どもの未来社
- 浅井春夫 良 香織 鶴田敦子(2018)「性教育 はどうして必要なんだろう？」包括的性教育 を進めるための50のQ&A 大月書店
- 二宮周平 (2017)「性のあり方の多様性」 ー一人ひとりのセクシャリティが大切にさ れる社会を目指して 日本評論社
- 橋本紀子・池谷壽夫 田代美恵子 (2018)「教 科書に見る世界の性教育」かもがわ出版
- 村田紗耶香 (2018)「消滅社会」河出文庫
- 村田紗耶香 (2018)「地球星人」新潮社
- 「性の権利宣言」<http://www.worldsexology.org/wp-content/uploads/2014/10/DSR->